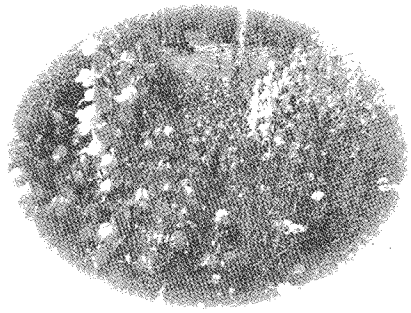
# 国連NGO横浜国際人権センター・うずしおブランチ
# T-over人権教育研究所・人権こども塾　ニュース



当時の中学生で一人、希有な存在がありました。
彼は中学時代、日々身体がくたくたになるまで柔道に打ち込んだ生徒でした。
そんな彼が当時を振り返って記してくれました。

差別のない社会を作ろう。小学校のころから何気なく聞いてきた言葉です。

森口先生（本研究所共同代表）と同和問題についての授業で、多くの同級生が自主的に挙手をして自分の思いを語っていました。

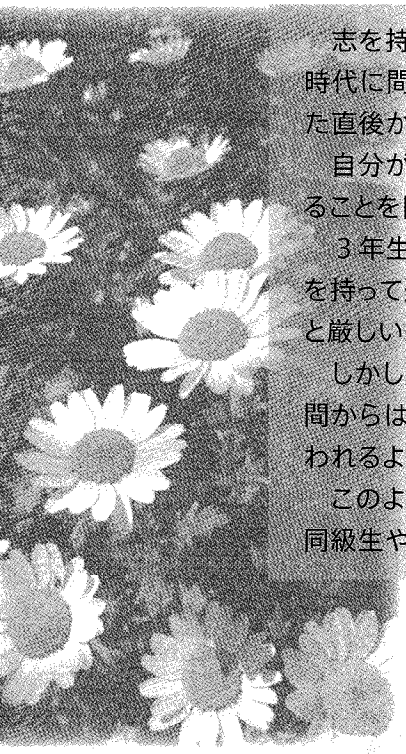
同級生の中に差別を受ける可能性がある人がこんなにも沢山いるのかと思う一方で、自分は差別をしないで生きていこうと決めた自分がいました。

人の前で自分の思いを語るのは勇気がいることでした。毎時間、毎時間、今日は発表しようと決めて出席をするのですが、なかなか手をあげる勇気が出ず時間だけが過ぎていく。手をあげようとすると胸がドキドキして熱くなる。他人から変に思われないか不安だから手をあげることができない。仲間外れにされたくないという思いから、周りの人がどのように思っているのかを確かめたくなる。自分は発表をしなくても、発表した仲間と同じ思いであれば安心できホッとする。

私は決して多く発表した生徒ではありませんでした。勇気を振り絞り初めて発表する仲間がいると、教室の全員が聞き入っていました。涙を流しながら心の内を語った仲間は、発表後には穏やかな表情をしていたことを覚えています。

彼のような子もいます。
みんながみんな、リーダーとして堂々と発言をする子ばかりではありません。
ただ、聞く。聞いて、学ぶ。
決してリーダーではないけれど、それでもフォロワーとしてしっかり学んでいるのです。
リーダーシップもいい。けど、フォロワーシップもいい。
花がいつか咲くことを信じて、ただ問い続けるのです。
彼の場合、その花を後に咲かせることになります。

彼は高校へと進学し、レスリングで全国制覇をめざすようになります
が、待ち受けていたのは、中学時代とは違う、理不尽な世界でした。
そこで彼は、中学時代に学んだことを生かそうと奮闘を始めるのです。



志を持ち高校に進学するのですが、先輩からは毎日のように理不尽な指導を受けました。中学時代に間違っていることは間違っていると言える人間になろうと語り合いましたが、高校に入学した直後から世の中の理不尽さを感じました。

自分が先輩になったら理不尽な指導はやめよう。そう決めていたため、必要な指導以外はやめることを同級生に打ち明けたこともありました。

３年生になりキャプテンを任されると、自らの思いで練習内容を決めることになります。高い志を持って進学し、ある程度の結果を出していた私は、より高い目標に向かってチームを引っ張ろうと厳しい練習を指揮するようになりました。

しかし、中学校で学んだようにはいきませんでした。一人だけとび抜けた目標では、チームの仲間からは賛同を得続けることは難しく、厳しい練習よりも楽な練習をしたがる仲間が後輩から慕われるようになっていきました。

このようになると統制がとれず、チームの雰囲気は悪くなります。また、理不尽な指導を始める同級生や後輩があらわれ始めてしまいました。

挫折を味わった彼は、それでも志を失うことなく、大学へと進学します。

本気の人権学習は、――「すべてを変える」

うずしおブランチ代表